

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 4 月 21 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00430

研究課題名(和文) 20世紀英国ミドルブラウ文学・文化の国際的展開に関する学際的研究

研究課題名(英文) British Middlebrow Writers in the Balkans and the Pacific

研究代表者

松本 朗 (Matsumoto, Hogara)

上智大学・文学部・教授

研究者番号：00365678

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：英国ミドルブラウ文学・文化は、一般的に、ハイブラウで前衛的なモダニズム文学の作家たちやケンブリッジ大学英文科の知識人によって、「中程度の教養しか持たない者が読む文学」であり、商業主義的なメディアの中で大衆にアピールすることを目指すものであると軽蔑されることが多かった。本研究では、そのようなミドルブラウ文化・文学の担い手であるOlivia ManningとW. Somerset Maughamが、商業主義を巧みに利用しつつも、革新性と国際性を有した執筆活動を行っていたことを、作家の定期刊行物上の活動と小説を分析することで明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

モダニズム文学は一般にミドルブラウ文化・文学と敵対関係にあったと言われるが、本研究は、盛期モダニズムの隆盛後の1930年代英国において、ミドルブラウ作家たちが、教養と文化を求める労働者階級や下層中流階級の読者層にたいして、物語の面白さでアピールするだけでなく、1945年の福祉国家設立への布石となるような革新性を含む大衆教養主義を意識した執筆活動を定期刊行物や文学作品で行ったことを明らかにした。本研究はさらに、Manningなどイギリス作家がルーマニア、ギリシア、カイロにおいてBritish Councilを通じて現地の人々と交流し、イギリス国外の動向を視野に執筆活動を行っていたことを示した。

研究成果の概要(英文)：This project demonstrates that the interwar British middlebrow culture, often dismissed by highbrow modernist writers and Cambridge academics as insignificant and commercialist, is in fact a site where writers intellectually stimulate the new reading public and question the social and political problems of Britain and the world. Among such important middlebrow writers are Olivia Manning and W. Somerset Maugham. Their works, written while they traveled extensively in Europe, the Balkan, and Egypt, criticized the provincialism of the British publishing industry and British writers.

研究分野：イギリス文学

キーワード：ミドルブラウ ジェンダー ヨーロッパ文学 イギリス文学 モダニズム 定期刊行物研究

### 1. 研究開始当初の背景

2010年代以降、英米のモダニズム研究が拡大する一方で、新興のミドルブラウ層にアピールすることを試みた英国ミドルブラウ文化・文学に関する研究が興隆した。本研究は、そうしたミドルブラウ文化研究の動向を継承しつつも、戦間期の英国文化を保守的で内向きなものと見なす英国ミドルブラウ研究の傾向に疑問を付し、英国ミドルブラウ文学・文化が、実は、ヨーロッパ大陸におけるファシズムの擡頭と知的階層や若者の間で共産主義の広がりが見られたいわゆる1930年代の「政治の季節」から第二次世界大戦の時期にかけて、ヨーロッパの政治状況との関係で揺れる英国のナショナル・アイデンティティについて考察する、革新性を有する後期モダニズムの潮流の重要な一部ではなかったかとの仮説から出発した。

### 2. 研究の目的

本研究の当初の目的は、1930年代から1960年代にかけての英国ミドルブラウ文学・文化が有した国際性と革新性を明らかにすることであった。具体的には、(1) この分野で重要な役割を果たした **Olivia Manning** と **W. Somerset Maugham** という、英国の外で第二次世界大戦を経験し、英国内外の高踏的・大衆的定期刊行物に寄稿した重要なミドルブラウ作家に焦点をあて、(2) これらの作家の評論、短篇・長編小説、小説の映画化作品のなかでも、(i) **Maugham** に関しては東南アジア、(ii) **Manning** に関してはバルカン半島、に関係するテキストを、最近になって深化した「後期モダニズム」研究と、19世紀末から国際化した出版文化の文脈に再配置した上で、(3) ナショナリティとジェンダーの観点から分析し直すことによって、(4) 「後期モダニズム」の一部としての英国ミドルブラウ文学・文化が、第二次世界大戦から冷戦期にかけて、ヨーロッパとの関係で揺れる英国のナショナル・アイデンティティや、世界各地のモダナイゼーションの過程の不均衡を表象する、クリティカルな営みであったものと捉え直し、学際的に論じることを目指した。

### 3. 研究の方法

- (1) 1, 2年目は海外の図書館で海外の定期刊行物を対象とした資料調査・収集を行うと同時に、英国ミドルブラウ文化・文学についての基本的研究書を読むことによってその文化史的・政治史的・経済史的な文脈を把握した。また2年目には、アテネ市で開催された **European Society of Periodical Studies** のワークショップに登壇する他、定期刊行物研究を専門とする海外の研究者と知見の共有・意見交換を行った。
- (2) 2年目の年度末、および3, 4年目はコロナ禍により海外渡航が不可能となり、英国ミドルブラウ文化・文学についての基本的研究書を読むことについては継続して行ったが、予定していた海外の定期刊行物の調査の五割程度が不可能となった。それにより、ある時期のある定期刊行物の内容を包括的に調査することは叶わなくなったが、その一部を断片的にはあるがインターネット上の古書店で入手することができたため、その分析を行った。具体的には、**Olivia Manning** が寄稿したカイロ刊行の定期刊行物については一部入手することができたが、**W. Somerset Maugham** が寄稿した定期刊行物については、入手を断念せざるをえなかった。したがって、3, 4年目には、英国ミドルブラウ文化・文学に関する文化史的・政治史的な文脈の把握、および、**Manning** 関係の一次文献と小説テキストの分析を行った。
- (3) 4年目には、日本英文学会第93回大会においてシンポジウム「第二次世界大戦と英語圏文学」のパネリストの一人として登壇し、**Manning** のバルカン三部作の第1部を扱う研究発表「難民たちの英文学」を行った。それを論文化した「難民と英文学—オリヴィア・マニングのバルカン三部作と後期モダニズム」は論文集『第二次世界大戦とイギリス女性作家たち』(音羽書房鶴見書店)に収録されるかたちで2022年に刊行予定である。
- (4) 海外の図書館で定期刊行物のアーカイブ調査をすることが不可能になった事態を受けて、研究計画の一部修正を行った。具体的には、インターネット上で過去のアーカイブを見ることができる『ニューヨーカー』誌を調査することで国際的ミドルブラウ作家 **Alice Munro** に関する調査を行い、また上智大学の図書館で過去の定期刊行物のアーカイブの調査が可能である宮本百合子の執筆活動を反ハイブラウなものとし、調査と研究を行った。

### 4. 研究成果

2019年には、アテネ市で開催された定期刊行物に関する国際学会のワークショップに登壇し、ギリシアおよびイタリアの研究者と意見交換を行い、今後の共同研究について話し合うことができた。2021年には、日本英文学会第93回大会シンポジウム「第二次世界大戦と英語圏文学」の講師として登壇し、**Manning** のバルカン三部作に関する発表を行い、それを論文化して論文集『第二次世界大戦とイギリス作家たち』(音羽書房鶴見書店)(2022年刊行予定)に寄稿

した。このシンポジウムでは、準備・構想段階から 8 ヶ月以上に渡って第二次世界大戦期の文学を専門に研究する日本国内の研究者と意見交換をすることができた。

その他、2020 年初頭からのコロナ禍により **W. Somerset Maugham** の一次資料の入手が叶わなくなったことを受けて、代理的に、国際的定期刊行物誌上で活動するミドルブラウ作家である **Alice Munro** の短編小説と『ニューヨーカー』等の定期刊行物の関係についてインターネット上のアーカイブで調査を行い、論文を『カナダ文学研究』(日本カナダ文学会) および『英文学と英語学』(上智大学文学部) に合計 2 本掲載した。

また、本務校の上智大学で 20 世紀前半に日本国内で刊行された定期刊行物を調査することは可能であったため、宮本百合子が **Virginia Woolf** の *A Room of One's Own* と日本の女性作家を関連づけて論じる際に、複数の定期刊行物上で日本の女性作家と海外の作家の関係について論じていたことを発見し、**Woolf** というイギリスのハイブラウ作家と、宮本百合子という日本のフェミニストであるリアリスト作家との関係について論じる論文を執筆した。論文は、*The Edinburgh Companion to Virginia Woolf and Contemporary Global Literature (Edinburgh UP, 2021)* に収録され、刊行された。

総括すれば、コロナ禍により **W. Somerset Maugham** に関係する定期刊行物等の一次資料の収集は叶わなくなったが、**Olivia Manning** の定期刊行物での活動と小説については調査と分析を行い、第二次世界大戦期のイギリス作家がルーマニア、バルカン半島、カイロ等の地で執筆活動や定期刊行物への寄稿活動を行い、イギリスのナショナル・アイデンティティとヨーロッパとの関係を不安定かつ危機的なものとして批判的に表象していたことを明らかにすることができた。この調査の副産物として、海外のイギリス作家が、イギリス国内向けの定期刊行物だけでなく、現地の人びとと対話すべく、**British Council** を通じて現地の人びとと交流したり、**British Council** の定期刊行物に寄稿するなどしていたことを知ることができた。つまり、これらのイギリス作家は自身を イギリス人 としてだけでなく、第二次世界大戦時の 難民 と見なし、戦時における難民の問題というハンナ・アーレントらが取り組んだ問題に近接する問題意識をもって作家活動を行っていた。この問題については、今後さらに調査と研究を深める予定である。

また、海外の図書館で調査をする代わりにインターネット上あるいは日本国内図書館で可能な定期刊行物研究を行うことによって、**Alice Munro** と宮本百合子に関する研究を行う等、国際的ミドルブラウ研究に普段とは異なる角度から光を当てることができたことも、コロナ禍による研究計画の一部修正のもう一つの副産物であった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 松本 朗	4. 巻 27
2. 論文標題 「メタモダニスト、アリス・マンローの病の表象ー個人の美的瞬間から共同体を補綴する瞬間へ」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『カナダ文学研究』	6. 最初と最後の頁 21, 40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本朗	4. 巻 55
2. 論文標題 「モダンな女性知識人は擬装する ヴェラ・プリテンの『結婚 ある過渡期の小説』」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『英文学と英語学』	6. 最初と最後の頁 25, 44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松本 朗	4. 巻 58
2. 論文標題 「ポストヒューマンの修辞学ーアリス・マンロー「クマが山を越えてきた」におけるアルツハイマー型認知症の表象」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『英文学と英語学』	6. 最初と最後の頁 21, 41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 3件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 松本朗
2. 発表標題 「アリス・マンローの短篇小説」
3. 学会等名 日本カナダ文学会第37回年次研究大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hogara Matsumoto
2. 発表標題 "The Canadian Middlebrow?: Chatelaine and the Changing Image of Alice Munro"
3. 学会等名 8th ESPRit Conference: Periodicals and Visual Culture (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松本 朗
2. 発表標題 「難民たちの英文学」、シンポジウム「第二次世界大戦と英語圏文学」
3. 学会等名 日本英文学会第93回大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 河内 恵子編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 音羽書房鶴見書店	5. 総ページ数 300
3. 書名 『第二次世界大戦とイギリス女性作家たち』	

1. 著者名 土岐恒二、吉田朋正編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 1026
3. 書名 『照応と総合——土岐恒二個人著作集 + シンポジウム』	

1. 著者名 Jeanne Dubino, Paulina Pajak, Catherine W. Hollis, Celiese Lypka, Vara Naverow, eds	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Edinburgh University Press	5. 総ページ数 445
3. 書名 The Edinburgh Companion to Virginia Woolf and Contemporary Global Literature	

1. 著者名 松本朗・岩田美喜・木下誠・秦邦生編、板倉徹一郎・猪熊恵子・大久保譲・小川公代・唐澤一友・川崎明子・栗山智成・小山太一・高桑晴子・武田将明・田中裕介・中井亜佐子・長島佐恵子・中山徹・松井優子・溝口昭子・武藤浩史・吉田直希	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 404
3. 書名 『イギリス文学と映画』	

1. 著者名 中央大学人文科学研究所編（著者：篠崎実・新井潤美・宮丸裕二・松本朗・福西由実子・秋山嘉・丹治愛・安藤和弘）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央大学出版部	5. 総ページ数 243
3. 書名 『英文学と映画』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------